

文部科学省

「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業

(学びの機会充実ネットワーク)」

令和6年度 成果報告書

静岡県教育委員会

1. 事業概要

1.1. 本事業に取り組む課題と目的

静岡県では中山間地域を中心に高等学校の小規模化が進行し、以下のような課題がある。

- ・配置される教員数が少ないことにより、生徒の学習ニーズに応じた科目開設が困難であり、学びの選択肢が限られること
- ・同じく配置される教員数が少ないことにより、習熟度別授業の実施ができないこと。
- ・生徒が多様な価値観や考え方に触れながら学び合う機会が限定的であること

これらの課題を踏まえ、生徒の学びの機会を保障し、公正で個別最適な学びを実現させ教育の質を高めることを目的に「センター配信型遠隔教育ネットワーク」を構築し、遠隔授業の配信機能を集約した配信拠点の開設と、受信校間の連携による学び合いの機会を充実に向けた取組を実施する。

1.2. 本事業を通して明らかにしたい事項

(1) 遠隔授業の実施による小規模校の学びの機会の保障、教育水準の向上の実現性

生徒の興味・関心に基づいた科目開設や、遠隔教育を活用した探究的な学びの深化を図り、主体的な学びを促進する。

(2) 学校間連携を通じた生徒の協働的な学びの進化

他校の生徒との意見交換やグループワークが可能な環境の整備と、学校の枠を超えた探究学習や特別活動等の実施を通して、生徒が多様な価値観に触れ、他者と自己のもの見方・考え方の違いを知りながら自己の在り方・生き方を考える学び合いの機会の充実を図る。

(3) 遠隔教育の活用による小規模校の魅力化推進

地域にしながら多様な学びを得ることを可能にし、特色ある教育課程を実現させる。

(4) 通信教育を活用した学びの個別最適化とその効果の検証

ICTを活用した学習支援について研究し、不登校生徒や遠隔地在住の生徒への学習支援を実現する。

(5) 遠隔教育ネットワークの持続可能な運営体制の確立

現状と課題を整理し、他県の先進事例を調査しながら、研究成果を蓄積しアップデートを続ける研究体制と、持続可能な「遠隔授業配信センター」の組織体制について、静岡県のゴールイメージを確立する。

1.3. ロードマップ

《遠隔授業に係る調査・研究の全体計画》

令和6年度	<ul style="list-style-type: none">・配信拠点の体制づくり（機器整備、運用指針、実施要綱作成など）・中山間地域の小規模校における配信科目ニーズ調査・遠隔授業における授業デザインの調査研究・学校の垣根を超えた学び合いの場づくりの研究及び実践
令和7年度	<ul style="list-style-type: none">・「遠隔授業配信センター」の運用（単位認定を伴う遠隔授業の実施）・拡大実施に向けた検討（2校同時配信の施行、小規模校の課題の整理）・持続化のための配信拠点の組織づくりの検討と実践・受信側体制（教員以外の配置、巡回指導）の課題の整理・分析
令和8年度	<ul style="list-style-type: none">・拡大実施（受信校数の拡大、学校間連携の深化）・遠隔授業配信センターの運営体制確立（研究、運営の持続化）
令和9年度以降	<ul style="list-style-type: none">・遠隔授業・通信教育の効果的な手法における研究成果の継走と発展・小規模校魅力化モデルの確立

《遠隔授業配信センター》

	令和6年度	令和7年度	令和8年度	令和9年度以降
対象校数	4校	4校	7校	10校程度
取組	配信・受信機器整備 学校連携（課程内・外）	遠隔授業配信センター開設 学校間連携（課程内・外）	拡大実施・2校同時配信 学校間連携（課程内・外）	本格実施

《通信教育に係る調査・研究の全体計画》

令和6年度	<ul style="list-style-type: none"> 通信制高校の現状と課題について調査、分析 遠隔スクーリング（書道）の研究 通信制高校生徒を対象にした学校の垣根を超えた学び合いの場づくりの実践
令和7年度	<ul style="list-style-type: none"> 各校における不登校・病気療養生徒に対する通信教育実施を想定した課題の整理・分析及び対策案の検討 各校における実施を想定した通信教育レポート課題の研究 遠隔スクーリング（書道）の試行 学校の垣根を超えた学び合いの場づくりの継続的な実践
令和8年度	<ul style="list-style-type: none"> 不登校・病気療養生徒に対する通信教育の在り方（完成年度） 学校の垣根を超えた学び合いの場づくりの発展的な実践

2. 遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組

2.1. 調査計画

センター配信型遠隔教育ネットワーク構築のため、以下の取組を行う。

- 運営委員会の設置
静岡県センター配信型遠隔教育推進事業運営委員会を設置し、協議会を実施する。
- 学校ニーズ調査の実施
小規模校における教育課程上の課題を整理し、生徒の学びの機会を保障するために配信を必要とする科目について、ヒアリング調査を実施し、その結果をもとに配信科目を検討する。
- ICT環境・機器環境の整備
受信校のネットワーク環境を確認し、配信拠点および受信校の遠隔授業実施に係る機器を整備する。
- ICTを活用した学校間連携活動の実施
構成校の希望生徒を対象に遠隔による課外活動を実施し、センター配信型遠隔授業の効果的な指導方法について調査・研究を行う。
- 先進事例の視察
先進県である高知県、北海道の遠隔教育モデルを視察し、運営体制、科目選定の基準、機器整備、効果的な遠隔授業の手法等について知見を得る。得られた情報をもとに静岡県モデルの検討を行う。

2.2. 実施体制

静岡県教育委員会を管理機関とし、管理機関、遠隔授業中心拠点（総合教育センター）、遠隔授業受信校、外部有識者による運営委員会を設置した。運営委員会では、「遠隔授業配信センター」の運営体制の検討や、調査・研究の進捗状況の報告を行い、益川弘如委員（青山学院大学）、塩田真吾委員（静岡大学）から指導・助言を得て、改善を加えた。

2.3. 取組概要

令和6年度は、令和3年度から実施してきた学校間連携（本校－分校間）による遠隔授業を継続させながら、遠隔授業配信センターの開設に向けて構成校の配信科目ニーズ調査、先進事例の視察等を通じた機器環境整備や、運営体制について調査・研究を行った。年間3回の運営協議会を経て、令和6年度末に静岡県遠隔授業配信センターを開設した。

また、中心拠点となる総合教育センターから「総合的な探究の時間」を想定した遠隔による課外活動を実施し、生徒の学習意欲を引き出す効果的な遠隔授業の方法や、受信校の連携など、センター配信型遠隔教育の拡充に資する指導方法の調査・研究を行った。

月	令和6年度 遠隔授業に係る調査研究
4月	<ul style="list-style-type: none"> ※本校 - 分校間遠隔授業を継続実施 ・「センター配信型遠隔教育推進事業運営委員会設置要綱」の作成 ・中心拠点の在り方やネットワークの取組の成果を評価・検証してもらうため、益川弘如青山学院大学教授、塩田真吾静岡大学准教授の2名を運営委員に選任
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・「EDIX（教育総合展）東京セミナー」に参加し、配受信機器、遠隔授業支援アプリ等の情報収集 ・「CORE ハイスクール・ネットワーク構想」参加県の報告書等から使用機器、使用ツール、配信科目の考え方などについてヒアリング調査を開始
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回運営委員会の実施（運営スケジュール、役割分担の確認/令和7年度以降の計画作成/次年度配信科目の検討/受信校の日課、時間割等の調整/その他） ・先進事例調査として高知県教育委員会に依頼し、オンライン質問会（実施体制、使用機器、遠隔教育実施の効果など）を実施 ・各受信校のネットワーク環境の調査
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回運営委員会での外部有識者の評価、意見を踏まえ、配信希望科目を再調査 ・静岡県遠隔授業配信センターのゴールイメージの検討 ・令和7年度配信科目の検討 ・学校間連携（遠隔による課外活動）の計画に係る調査・研究
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度配信科目を「物理」及び「物理基礎」に決定 ・各受信校において、選択対象となる生徒に説明し、科目選択及び科目登録を開始 ・静岡県遠隔授業配信センター及び受信校に設置する機器の仕様書完成 ・各受信校の使用教室の検討（ネットワーク環境の適正、エアコン設置状況など） ・垣根事業合同遠隔ミーティングへの参加
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・各受信校で、必要に応じて教育課程の変更、令和7年度科目登録、使用教科書の選定を実施 ・配信時間割案の検討 ・垣根事業運営指導委員会への参加（オンライン）
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・先進事例視察 <ol style="list-style-type: none"> ①高知県遠隔授業配信センター ②北海道高等学校遠隔授業配信センターT-base/北海道立夕張高校（受信校） ・モデル校生徒の放課後マイプロジェクト（カタリバ）への参加 ・伴走支援団体による遠隔授業受講生徒へのヒアリング調査に参加
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回運営委員会の実施（調査・研究報告） <ol style="list-style-type: none"> ①本校-分校間の取組における工夫や課題②他県視察報告/学校間連携計画/センター配信型による遠隔授業及び単位認定に関する運用指針の検討 ・長崎県「令和6年度遠隔教育サミット」参加（オンライン）

12月	<ul style="list-style-type: none"> ・学校間連携（遠隔による課外活動）の実施（12月～1月末までオリエンテーション含む全6回） ・遠隔授業配信センター運営体制の検討（配信教員の業務、勤務管理及び支援体制、拡大実施の方向性等） ・配信拠点及び受信校設置機器の入札
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・学校間連携（遠隔による課外活動）の実施及び研究結果の分析 ・第3回運営委員会（令和6年度活動報告）の実施（R7配信時間割/配信開始までのスケジュール/遠隔授業配信センター教員の勤務管理体制及び支援体制/学校間連携活動（遠隔課外活動）の報告/機器整備の状況/センター配信型遠隔授業運用指針/センター配信型遠隔授業広報リーフレット）
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・配信拠点及び受信校設置機器の設置 ・設置機器の動作確認 ・静岡県センター配信型遠隔教育実施要綱施行
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・広報用リーフレット完成 ・業者講習会（電子黒板の使い方、活用方法、遠隔会議システム xSync の使用方法） ・機器使用、トラブル対応マニュアル作成 ・試行配信（模擬授業）の実施 ・「遠隔授業配信教員オンライン座談会」（伴走支援団体主催）参加 ・遠隔授業教員へのオリエンテーション ・年間指導計画（各校への対面授業の計画を含む）の検討

2.3.1. 遠隔授業実施表

中心拠点	受信校	教科名	科目	教育課程 （※1）	開設 学年	遠隔授業実施理由 （※2）	受信側の配置体制 （※3）	遠隔授業実施回数/全授業回数 （※4）
伊豆総合高校	伊豆総合高校土肥分校	地理歴史	世界史探究	課程内	2学年	教科・科目充実型	受信校教員配置	73/98
伊豆総合高校	伊豆総合高校土肥分校	地理歴史	地理総合	課程内	3学年	教科・科目充実型	受信校教員配置	25/57
浜松湖北高校	浜松湖北高校佐久間分校	理科	生物基礎演習	課程内	3学年	教科・科目充実型	受信校教員配置	20/28
県総合教育センター	構成校	総合的な探究の時間	探究活動	課外活動	希望者	学習機会保障型	教室・一部自宅	6

※1 教育課程外で遠隔授業を行った場合、実施状況（夏期講座・補習等）を記入すること。

※2 学習機会保障型の場合、生徒が授業を受けた場所も記載すること。

※3 巡回型を実施した場合、受信側の配置体制欄にその旨も付記すること。

※4 教育課程外の取組の場合、総実施回数のみ記載すること。

2.4. 取組内容

1 遠隔授業配信センターの開設

(1) 運営委員会の設置

遠隔授業配信センターの開設に向けて、静岡県センター配信型遠隔教育推進事業運営委員会を設置し、遠隔授業配信センターの運営体制、配信科目、機器整備、遠隔授業の効果的な在り方、受信校とのネットワーク構築について検討、協議を行い、令和6年度末に静岡県遠隔授業配信センターを開設した。

(2) 配信科目ニーズ調査

センター配信型遠隔授業で実施する科目を検討するにあたり、中山間地域の小規模校について、教育課程上の課題や、教員配置上の課題について、令和7年度受信校4校を対象にヒアリング調査を行った。ヒアリ

ング調査の結果、以下のような配信希望科目が上がった。

教科（特に希望する科目）	希望する理由
理科（物理・物理基礎）	今まで開講できなかった科目を、遠隔授業で開講できる
数学（数学Ⅱ、数学Ⅲ）	習熟度別クラスを展開できる
情報	講師の確保が難しい
地理歴史（日本史探究・世界史探究）	科目の専門性に課題がある

上記の結果を参考に、静岡県遠隔授業配信センターの配信科目の決定方針を以下とした。

- ・ 科目の専門性に課題がある科目
- ・ 教員数が少ないことにより習熟度別クラス展開ができず、生徒の多様な進路希望に対応できない科目
- ・ 受講希望生徒数が少ないため、学校で開講の見通しが立たない科目
- ・ その他、多様な学びの機会の保障のために、管理機関が必要と判断した科目

検討の結果、今まで開講できなかった科目を開講することで、生徒の選択の幅が広がること、専門性の高い教員による授業を実施できることから、令和7年度配信科目は「物理」・「物理基礎」に決定した。

遠隔授業の導入にあたっては、生徒、保護者に丁寧な説明が必要である。初めて遠隔授業に参加する学校では、遠隔授業とはどのようなものか、十分な説明をする必要があった。また、新規に「物理基礎」を開講する学校では科目について十分に説明を行った上で科目登録を行い、その結果、令和7年度の配信について以下のように決定した。

《令和7年度遠隔授業配信センター実施科目》

受信校	科目	単位数	開設学年	受講生徒数
松崎高校	物理	4単位	3学年	4人
伊豆総合高校土肥分校	物理基礎（新規開講）	2単位	2学年	5人
浜松湖北高校佐久間分校	物理	3単位	3学年	3人

《静岡県遠隔授業配信センター 令和7年度運営体制》

項目	内容
目的	教員数の少ない中山間地域の小規模校に遠隔授業を実施し、生徒の学びを保障する
配信機能	配信機能を静岡県総合教育センター内に置く
（理由）	授業教員が遠隔授業づくりを研究するための支援体制を整える
使用機器	電子黒板、大型モニター、マイクスピーカー、カメラ、パソコン
配信科目	理科（物理・物理基礎）
受信校数	3校（松崎高校・伊豆総合高校土肥分校・浜松湖北高校佐久間分校）
授業教員	教員1名を配置
備考	学校間連携（本校－分校間）による遠隔授業は各校の実態に合わせて継続して行う

(1) 今後の課題

令和7年度4月から遠隔授業配信センターの運用がスタートする。遠隔授業教員と共に、遠隔授業の効果的な在り方を研究し、授業の質の向上に努める。遠隔授業教員、管理機関、受信校が連携し、運用上生じる課題や、令和8年度拡大実施に向けた以下の課題について検討し、取組む。

① 教育課程

- ・ 拡大実施に向けた配信科目の設定

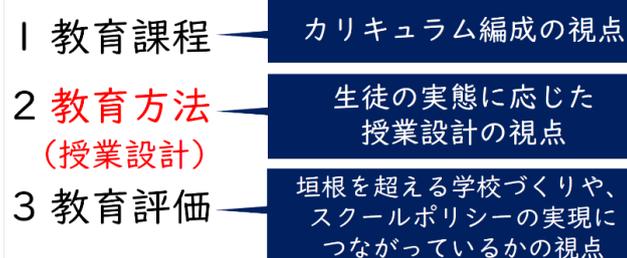
- ・ 2校同時配信授業実施に向けた課題の整理と検討
- ② 教育方法（授業設計）
- ・ 公正な個別最適な学び、必然性のある協働的な学びの実現
 - ・ 実社会、実生活につながる探究的な学びの実現
 - ・ 自己調整をしながら学びに参加し、学び方を獲得することができる学習者の育成
- ③ 教育評価（本事業の取組の成果）
- ・ 垣根を超える学びの実現や各校のスクールポリシーの実現につながっているか
 - ・ 生徒の進路実現につながっているか
 - ・ 生徒が主体的、協働的に学び、学ぶことの楽しさや喜びを実感するのに役立っているか
- 以上の視点で成果について定期的に検証し、改善しながら取組む。
- ④ 「静岡県センター配信型遠隔教育ネットワーク」のゴールイメージの確立
- ・ 持続可能な「遠隔授業配信センター」の組織体制づくり
 - ・ 静岡県の教育における現状と課題を整理し、ネットワークのゴールイメージを確立させる

2 遠隔授業における指導方法の調査・研究

遠隔授業に係る調査・研究は、①教育課程（カリキュラム編成、2校以上同時配信の可能性を踏まえた実践等）、②教育方法（生徒の実態に応じた授業設計、学習意欲を引き出す授業デザイン、学習評価の在り方等）、③教育評価（本事業の取組が垣根を超える学校づくりや各校のスクールミッションの実現につながっているか等）の3つの視点がある。

遠隔授業の調査・研究

調査・研究の全体像（3つの視点）



「放課後探究教室」実施概要

実施期間 R6年12月～1月(全6回) 午後4時から5時

対象者 令和7年度配信モデル校、賀茂地域連携校、
静岡中央高校の希望生徒

申込人数 26名

授業者 総合教育センター高等学校支援課
辻陽介教育主査・加藤博己教育主査

配信方法 Zoomによる配信

受信方法 1人1台端末を使用し、各学校の教室
もしくは自宅で受講(スマートフォン可)



先進県視察（高知県・北海道）やこれまでの静岡県を含む全国での調査研究報告からも、特に遠隔授業においては、授業そのものの質の向上が重要であることを強く感じた。遠隔授業の教育方法における調査研究で得られた成果が波及し、授業の形態（遠隔・対面）に関わらず、全体で学びの質の向上を目指し、実現できるネットワークの構築を実践したい。その思いから、ネットワーク構成校の希望生徒を対象にした遠隔による課外活動「放課後探究教室」を企画・実践した。

(1) 企画概要

遠隔授業配信センターと小規模校等とのネットワークの構築に向けて、ICTを活用した受信校の学校間連携の取組を試験的に実施し、生徒の学習意欲を引き出す効果的な遠隔授業の方法や、受信校の連携など、センター配信型遠隔教育の拡充に資する指導方法の調査・研究を行う。

(2) 実施内容

ネットワーク構成校の参加希望生徒（申込人数26人）を対象に、「総合的な探究の時間」を想定した試験的な課外授業をセンター配信型遠隔教育（遠隔授業）として放課後に実施し、参加生徒が多様な他者との学び合いを通して、表現力、課題解決力など、幅広いスキルを向上させることを目指して実施した。

- (3) 対象生徒 構成校（下田高校・下田高校南伊豆分校・稲取高校・松崎高校・伊豆総合高校土肥分校・浜松湖北高校佐久間分校・静岡中央高校（定時制・通信制））の希望生徒
- (4) 授業者（教育課程外の取組） 総合教育センター高等学校支援課 辻陽介教育主査、加藤博己教育主査
- (5) 実施期間 令和6年度12月～1月の水曜日または木曜日（16時～17時）の全6回
- (6) 実施場所 配信側：遠隔授業配信センター（総合教育センター） 受信側：教室、もしくは自宅
- (7) 配信における使用ツール ZOOM（ビデオ会議）、Google Classroom(学習管理)
- (8) 「放課後探究教室」授業内容
- 第1回 オリエンテーション「自己紹介を磨こう」令和6年12月11日（水）
 内容 様々なフレームを用いて自己紹介を行い、よりよい紹介の方法を探究する。
 目的 遠隔課外授業参加者（生徒と生徒、生徒と教師）の関係性を高める。
- 第2回 「See-Think-Wonder」令和6年12月18日（水）
 内容 「見えること」、「思うこと」、「ひっかかること」を整理して考える手法を身に付け、見たものや考えたことから、問いを立てる。
 目的 対話によって試行を深め、問う力を養う。
- 第3回 「なりきり俳キング」令和7年1月9日（木）
 内容 写真を組み合わせて写っている対象になりきり、自分が感じたことを他者のやり方を参照にしながら17文字で表現し、説明する。
 目的 自分自身が感じたことを大切にしながら、豊かに表現する力を養う。
- 第4回 「ぴよんぴよんカエルをとぼそう」（実験）令和7年1月16日（木）
 内容 厚紙と輪ゴムを使い、運動に関する簡単な実験を通して物理の学びに親しむ。
 ※講師：静岡市立高校科学部
 目的 実験の材料を製作することを通して学びの場の一体感を感じながら、物理的な見方・考え方を働かせる機会を持つ。
- 第5回 「筆箱を創造する」令和7年1月23日（木）
 内容 デザインシンキングの5つのステップによって対話を重ねながら、相手の理想の筆箱を創る。
 目的 「まずやってみる」学び方を体感する。相手の「理想」と「現実」を引き出す対話を通して、課題設定する力を養う。
- 第6回 「未来新聞」令和7年1月30日（木）
 内容 これまで身に付けた力を踏まえてこの先10年間で叶えたい夢を考え、それが叶った未来の新聞記事を作り、相互にインタビューをする。
 目的 自分のこれまでの学びとこれからの未来を言語化し、自己を探究する力を養う。過去から学び、今の自分を認め、未来に期待を持ってこれからの学校生活に臨めるようにする。
- (9) この調査・研究により明らかにしたいことと、その検証方法
- 「遠隔授業配信センターと学校とのネットワークの構築（ICTを活用した学校間連携）に関すること」
- ・ 生徒が学校の枠を超えて多様な他者と協働的に学び合うための授業構成や、ICTツールの活用方法
 →Google クラブルームを介した事前事後の情報交換の実施と、自らの学びに必要な人と即時的につながるができる、必然性のある協働的な学びを実施する
 - ・ 授業者と生徒の信頼関係の構築
 →傾聴・質問・承認を柱として適切な自己開示と情報共有を行い、対話を重ねることで授業の中で関係性から価値が生み出されることを実感できるようにする
- 「生徒の学習意欲を引き出す効果的な遠隔授業の方法に関すること」
- ・ 遠隔授業において、生徒が安心して授業を受けられるようにするための手立て

→心理的安全性を担保するために、「話しやすさ、助け合い、挑戦、新奇歓迎」の要素を意識して場の設計をする

- ・ 遠隔授業において「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業構成の工夫
→学習指導案に「解決したい課題や問い」、「考えるための材料」、「対話と思考」、「学習の成果」を明確に示し、授業者が共通理解をしてTTを実施する
- ・ 遠隔授業において、生徒の学習意欲を引き出すための効果的な支援や授業構成
→教材はデータで用意するものと、実物を操作するものの両方を扱い、実験器具を同じタイミングで製作したり、対話を通して小グループで課題解決をしたりする経験を積み重ねることができるよう授業を設計する
- ・ 遠隔授業において、演習（ペアワーク及びグループワーク）を行う際に必要な支援
→ブレイクアウトルームに分かれても、クラウド上のツールを用いて常に全員がつながっている状況を保つ

「センター配信型遠隔教育（遠隔授業）における学習評価に関すること」

- ・ 遠隔授業において、学習状況をより詳細に把握するための1人1台端末の効果的な活用方法
→生徒も教師も常に同じデータベースにアクセスできる状態にしておき、データを介して生徒の学習状況を随時確認して、形成的評価を個別の指導に生かす
- ・ 遠隔授業における、指導と評価の一体化のための学習評価の方法
→評価規準を踏まえて観点別学習状況の（記録に残す評価の）評価の判断の基準を作成する際に、ICTを効果的に活用して資質・能力を育てるためのポイントを示す

なお、これらの検証にあたり、毎時間終了後に生徒対象の振り返りアンケートを実施し、検証材料とした。また企画終了後には、各学校にもアンケートを実施した。

《授業終了後の振り返りアンケート項目》※参加生徒対象

- ・ 今回の「放課後探究教室」を振り返ってください。いま、あなたの心の中にはどのような感情（気持ち・感じ）が浮かんでいますか？以下のリストの中からぴったりくるものを3つ選んでください。（1つ目から3つ目までを順に選択）
愛情に満ちた・幸福感・自信・熱中・興奮・望み・喜び・心動かされる・平安・爽快感・恐怖・イライラ・怒り・反感・離別・動揺・疲労・痛み・悲しみ・弱さ・あこがれ
- ・ なぜその感情が一番強いのですか？理由を教えてください。（理由を書くのは1番の感情だけで構いません。）
- ・ 「遠隔で話すこと（画面越しに話すこと）」について、あなたはどのレベルまで進むことができたと感じていますか。1つ選んでください。

レベル1：話すことが難しいと感じる

話すときに言葉が出てこない。

自分の意見や考えをうまく伝えられない。

他の人とのやり取りがうまくできないと感じる。

レベル2：なんとか話すことができる

話すときに少し言葉が出てこないことはあるが、全体的には伝えたいことが伝わる。

自分の考えを話すことはできるが、相手にうまく伝わったかは自信がない。

他の人とのやり取りが少しできるが、会話が続けづらいと感じることがある。

レベル3：自分の考えを整理して、はっきりと話せる

話すときに言葉が出てこないことが少なく、考えを順序立ててはっきりと伝えられる。

自分の意見や考えを相手が理解できるように、簡潔で明確な表現を使うことができる

他の人とのやり取りがスムーズで相手の意見にも適切に反応し、会話を続けやすいと感じる。

《学校対象アンケート》

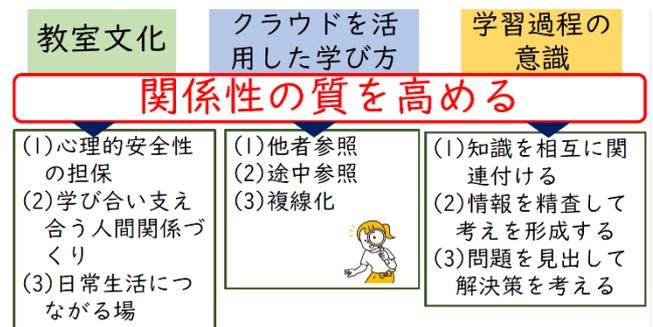
- ・ 「放課後探究教室」の企画内容について4段階評価（大変満足している～不満）とその理由
- ・ またこのような企画があれば、生徒を参加させたいか（理由）
- ・ 今後もこのような企画を立てる際の改善点や要望（内容、曜日や時間帯など）等

(10) 検証結果

今回の調査研究にあたり、「関係性の質を高めることで思考と行動の質が変わり、結果（アウトプット）が変容する」という仮説を立て、プログラム構成や授業デザインを行った。ここでは、「教育方法（授業設計）」について、①オンライン環境における教室文化、②オンライン環境におけるクラウドを活用した学び方、③学習過程（探究のサイクル）を意識した単元構成、の3つの視点で検証した。

「教育方法（授業設計）」の研究

- (1) オンライン環境における教室文化
- (2) オンライン環境におけるクラウドを活用した学び方
- (3) 学習過程（探究のサイクル）を意識した深い学び



① オンライン環境における教室文化

教室文化については、「心理的安全性（話しやすさ、助け合い、挑戦、新奇歓迎）が担保されている場」、「互いに学び合い、支え合う人間関係づくりができる場」、「教室での学びが日常生活につながる場」であることを目指した。

授業の初めにはグラドルールを示し、安心・安全な教室づくりのための約束と、この教室で学ぶにあたって参加者一人一人が大切にしたいことを確認した。この教室で初めて出会う他校の生徒と学び合うにあたり、参加者の関与の種類を示しながら、自分自身がどのような関わり方で参加するかを全員で考え、お互いの学びを支え合うという一人一人の意識を醸成することを心掛けた。

また、授業者は生徒を「今日もよく来てくれたね」の気持ちで迎え、「あなたのその意見はとてもいいね」「その気付きはとても価値があるね」と傾聴、承認、あと一步を引き出す支援の声掛けを行った。授業者の思いは、遠隔であっても必ず生徒に届くと実感している。

今回工夫をしたもう一つの点として、ブレイクアウトルームに分かれて話し合い活動を行う際、適切なタイミングで適切な支援が届けられるように、ルーム数分のパソコンを用意し、全体を一目で把握できるようにした。また、これまでの調査研究から、教師の顔が見えることが生徒を引き付ける効果があることが分かったため、資料提示中も常に教師の顔が見える工夫をした。教師の顔が見える＝教師の人となり伝わり、信頼関係の構築にもつながることを実感した。

毎時間の終わりには、本時の学びを日常生活につながる言葉（例えば帰り道の景色がいつもとは違った視点で見えるような言葉）スライドで示し、この教室で得たことが日常生活にもつながるための工夫を行った。

教室文化 (1) 心理的安全性の担保

はじめの一歩

約束

- 録画、録音、スクリーンショットはしないようにしましょう。
- 教室の写真や、他の人の発言した内容を勝手にSNSに発信しないようにしましょう。
- お互いのことは、相手が決めたニックネームで呼びましょう。

はじめの一歩

グラウンドルール (大切にしたいこと)

Be present	「今ここ」を意識を
Be open	自分と異なる視点に心を開く
Be engaged	自分ごとで考える
Be responsible	自分の学びと他者の学びに責任を持つ

安心・安全な教室づくりのためのグラウンドルール

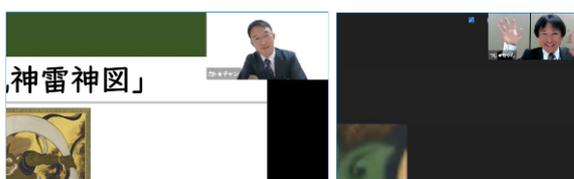
教室文化



全てのブレイクアウトルームを見守れるよう、ルーム数分Ipadを用意。対話がうまく進まないグループに教師が入ってサポート

スライド資料提示中でも、教師の顔が見える

教室文化



雷神神図

教師の顔が見える=生徒を引きつける効果

教室文化 (3) 日常生活につながる場

まとめ

あなたの「目」、何が見えるか?



あなたが見るから、そう見える
大切に、磨いていきましょう

本時の学びを、日常生活につながる言葉で伝える

② オンライン環境におけるクラウドを活用した学び方

遠隔授業の有効性の一つに、クラウドを活用することで、他者の学びを参照することができる点が挙げられる。特に、スライドの協同編集機能を利用し、思考の途中段階を参照し合うことができる点は、大変効果的であることを実感した。また、他者参照は、スライド等の資料共有だけでなく、参加者同士、お互いの顔が見えることで、例えば顔きながら話を聞く、表情で反応する、など、学びに向かう姿勢についても発揮された。

クラウドを活用する利点のもう一つは、学びの複線化を実現できることである。授業で使用した提示資料やワークシート、生徒の成果物についてはクラスルームに提示し、学習者がいつでも必要な時に学びを振り返ることができるようにした。それだけではなく今回は補足資料や、授業担当者による「バックストーリー」もクラスルームに提示した。授業時間内ではどうしても伝えきれない部分が出てくるため、単元のねらいや授業者の思い、更に踏み込んで学びたい生徒に向けた補足資料などを提示した。

クラウドを活用した学びは、他者参照、途中参照、学びの複線化の実現という効果があった。

クラウドを活用した学び方 (3) 複線化

高橋倫典先生
バックストーリー

「see-think-wonder」はハーバード大学教育大学院で開発された思考ツールです。ホームページの権利元によると、「このツールは、生徒が観察・経験し、思い・疑問や気づきを通話し、それにより、自分ごとを構築し、授業の発展を促す」とあります。今回の活動の目的のひとつです。

今回の活動は、「雷神神図」に基づき、各自も思いついた疑問、疑問事項(生活や学習)の提示を求めています。江戸時代中期の画家である鳥居清長(1698-1776年)が複製したことで有名な、尾形光琳の絵巻の複製である「雷神図巻」は、この「雷神神図」に着想を得ているのではないかと、2015年に「みらいの未来」の中で述べられています。今回の活動を通じて、鳥居清長の絵巻と鳥居清長の「雷神神図」の関係性について、みなさんにも興味を持ってもらいたいと思います。また、今回の活動を通じて、みなさんにも興味を持ってもらいたいと思います。

今回の活動は、鳥居清長の「雷神神図」に基づき、各自も思いついた疑問、疑問事項(生活や学習)の提示を求めています。江戸時代中期の画家である鳥居清長(1698-1776年)が複製したことで有名な、尾形光琳の絵巻の複製である「雷神図巻」は、この「雷神神図」に着想を得ているのではないかと、2015年に「みらいの未来」の中で述べられています。今回の活動を通じて、鳥居清長の絵巻と鳥居清長の「雷神神図」の関係性について、みなさんにも興味を持ってもらいたいと思います。また、今回の活動を通じて、みなさんにも興味を持ってもらいたいと思います。

今日の話

「さらなる高みを目指して探究を続けてみてください」
(静岡市立高校科学部)

多角的に「雷神神図」を眺めてみることで、気づきや疑問が湧いてくるかもしれません。仮説を立てて、やってみよう。仮説が間違っても大丈夫。自分の仮説がどこまで真が分かるか、大きな発見、楽しみでやってみよう!

授業で伝えきれない部分(補足)をクラウドに提示

授業内容

12/18 (水) see-think-wonder

12/18 (水) see-think-wonder

12/18 (水) see-think-wonder

12/18 (水) see-think-wonder

まとめ

今日の振り返りのその前に……

雷神、雷神は実は梅の樹になっていた！(かもしれない)という話

知っていますか??

スライド資料、共有資料等をClassroomに提示

③ 学習過程（探究のサイクル）を意識した単元構成

単元全体、また、1回の授業でも、探究のサイクルを意識した学習過程を意識した構成を立てた。また、授業内では、授業者がスライドで説明をする場面、リアルタイムで書き込みをする場面、対話の場面、グループワークの場面、個の活動の場面、実際に器具を使って実験をする場面など、様々な場面を組み合わせることを意識した。

第4回「ぴよんぴよんカエルを飛ばそう」では、ゲストティーチャーに静岡市立高校科学部を招いて、実験に取り組む授業を行った。1時間の授業を、静岡市立高校科学部の生徒が教師として授業を行い、参加者は事前に送付された実験キット（紙、はさみ、テープ、計測用紙テープ、輪ゴムなど）を使って実験を行った。この回は、仮説や検証を通して、常に活発な意見交換が行われていた。遠隔授業の有効性の一つとして、ゲストティーチャーを招いた特別授業や、他校の生徒を招いて共に学び合うなど、様々な場面を取り入れることができるという点がある。この実験には、興味を持った中学生も1名参加している。オンライン環境では授業者と受講者、受講者と受講者が、フラットな立場で交流することができることも特徴の一つで、協働的な学びの可能性が広がることを実感した。

学習過程の意識を生徒にも意識させることが重要である。ここでも、クラウドを活用し、次回の授業予告資料を提示し、今回の授業とのつながりを意識できるように工夫をした。このことにより、生徒は、前回の学びを生かしてワークに取り組むことができ、ステップアップしていることを生徒自身が実感することができた。

学習過程の意識

放課後探究教室「ぴよんぴよんカエル」(1月16日(木))振り返り

本時の探究のサイクル

思いを持つ 「ぴよんぴよんカエルを高く飛ばしたい!」

↓

問いを立てる 「高く飛ばすには、どんな工夫が必要か?」

↓

仮説を立てる

↓

やってみる!!(仮説の検証)

探究のサイクルを意識した単元構成

今日のポイント

仮説を立てる=教材の見方・考え方を働かせてみる

ぴよんぴよんカエルを高く飛ばすために、いろんな材料をどう組み合わせるのが良いか、考えました。
「輪ゴムが良いのか、幅が広い方が良いのか?」紙の厚さに関係があるか?「輪ゴムの強度はどうするか?」など。
その中で、「風を強くすると力が働くのではないか?」と仮説を立てて、それを試してみました。
実はこの紙、「理科」(※おそらく今回は「物理」)の力が関係しているのでは??)のものの方が考え方を働かせていたのです。

学習過程の意識

学びのつながりを意識し、次回が楽しみになる予告

放課後探究教室

**次回は
なりきり俳キング**

※写真が2枚必要です

学習過程の意識

第1回(オリエンテーション)

【日時】12月11日(木)「自己紹介を聞く」

目的:参加者(生徒と生徒、生徒と教師)の関係性を高める

ワーク:ブレイクアトルームに分かれて、様々なミッションに取り組みながら、より良い紹介の方法を探究する

ICTスキル: Zoomの使い慣(カメラ・マイクオン/オフゲーム)

ホワイトボードに書き込んでみる

ブレイクアトルームで対話をする

Padletを使って情報共有をする

探究スキル:3つの柱で対象を捉える

第2回

目的:対話によって思考を深め、問う力を養う

ワーク:グループで情報を整理し、問いを立てる

ICTスキル:ブレイクアトルームで画面共有をする

話し合いながらスライドの動画編集をする

付箋に自分の考えを記入して貼付する

探究スキル:情報を様々な角度で捉え、整理し、問いを立てる

教材の見方・考え方を働かせる

第3回

【日時】1月9日(木)「なりきり俳キング」

目的:感じたことを大切にしながら豊かに表現する力を養う

ワーク:対象になりきって、その気持ちをかゝって表現する。

対話を通して互いの作品を鑑賞し、受て合う

※経験度が上がるため、作業時、共有時にICTを配置

ICTスキル: GoogleClassroomで課題の指示を受け、メールで提出する

探究スキル:2つの情報を関連付けて対象を捉える

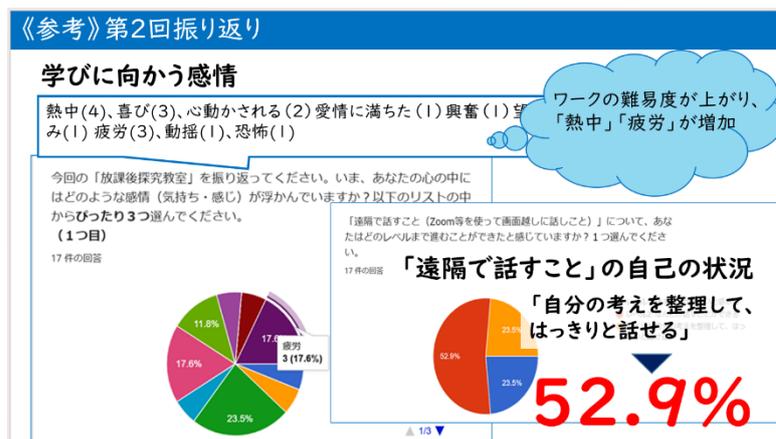
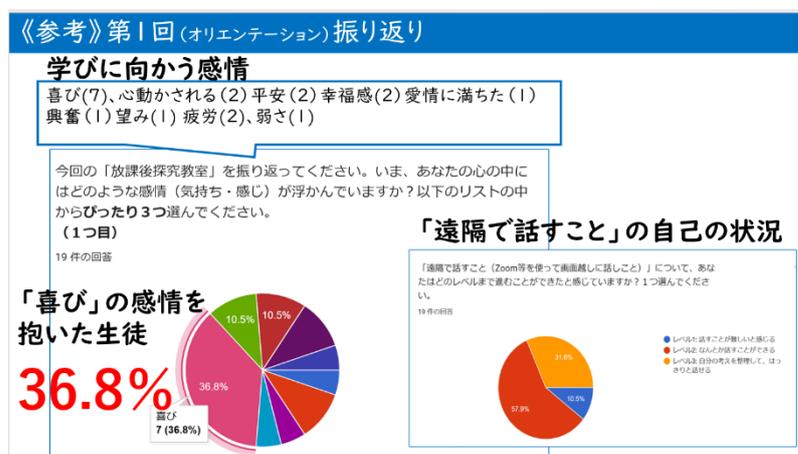
対象になりきることで、課題を発見する

学習者の実態に合わせて、ワークもICT活用もステップアップ

2.5. 考察

今回の調査研究においては、生徒の振り返りを行う際、授業方法が遠隔であるか否かにとらわれず、自分の学びへの参加の仕方をとらえることができるよう、「感情」を基にした振り返りを実施した。ICTスキルについては、「遠隔で話すこと」に焦点を絞って振り返りを行った。これは、遠隔授業の満足度が、音声の充実に左右されると考えたからである。

第1回のオリエンテーション後は、初めて遠隔を活用した場に参加できたことや、他校の生徒と交流ができたことを理由に「喜び」を選択した生徒が36.8%、一方で遠隔での交流に不慣れな生徒や、対話を苦手とする生徒は「疲労」、「弱さ」を選択している。この感情が、ワークの難易度が上がるにつれて、「熱中」「疲労」（夢中になったことによる肯定的な理由を挙げている）と選択の幅が広がり、回を重ねるごとに「自信」の回答が増えている。ICTスキルについては、オリエンテーション時には「自分の考えを整理してはっきりと話せる」（レベル3）と回答した生徒が31.6%から、最終回では80%に増加している。なお、最終回後の感情については「幸福感」40%、「喜び」30%、「興奮」10%、「熱中」10%、「心動かされる」10%であり、遠隔で話すことのスキルと、学びの充実感は比例していると言える。



以下、参加生徒の感想を一部紹介する。

- ・ 初めて合う人とでも、自分はこんなにも生き生きと話し合いができるということを知りました。自分一人では見つけることができなかつた長所を新しく発見することができたと思います。
- ・ 遠隔授業は人との触れ合いが薄いと感じるかもしれないが、画面越しでもしっかりと相手を感じ取ることができる。
- ・ 本来なら交流することができなかつた人たちと対話ができ楽しかった。
- ・ 自分が誰かとしっかりと話せるコミュニケーション力を持っていたらもっと出来たのだろうと思う。遠隔でこれだけのことが出来るということを感じた。

また、受信教室で生徒を見守ってくれた学校の先生方や、授業づくりを学びたいという理由で参加してくれた先生方から、以下の感想が寄せられた。

- ・ ICT を利用した学びの可能性に気づかせてくれる企画で、生徒のみならず、職員にもよい学びとなった。
- ・ 遠隔授業においても、探究的要素や対話性、深い学びを追求した運営に、心から敬意を表したい。
- ・ 遠隔授業にはデメリットもあるが、他校の生徒や専門知識を持つ教員との交流といったメリットがそれを上回る企画であった。当初はやや消極的な姿勢が見られた生徒たちも、後半には自ら積極的に取り組むようになり、良い学びの機会となった。
- ・ 他校の生徒と関わるができる画期的な企画だった。普段見られないような違った生徒の一面も見る事ができた。

「遠隔授業づくり」において大切にしたい視点

「遠隔授業づくり」において (1) 学習者主体の学びを実現する (一人一人が主人公)、(2) 生徒に届けたいメッセージを明確にする、(3) 教師も生徒もチームで取り組む (関係性の質を高める) ことを大切にしていきたい。

(1) 学習者主体の学びを実現する

- ① 公正な個別最適な学びの実現
- ② 必然性のある協働的な学び
- ③ 実生活、実社会につながる探究的な学び (見方・考え方をインストールする)

公正な個別最適な学びとは、生徒の学力によって課題やゴールを変えるのではなく、生徒が学び合う場面を充実させながら、お互いの優劣にとらわれずに、一人一人が試行錯誤できる機会を大切にする授業設計をすることだと考える。そのためには、必然性のある協働的な学びが必要であり、自分の学びを達成するために他者の考え方を参照してみたり、「自分一人ではできないけれど誰かと一緒だったできる」と力を合わせたりする必然性のある場面を多く設定する。そのような学びの中で、教科の見方・考え方など、学びの中で自分の中にインストールされた見方・考え方を授業中に発揮し、問いを自分自身に投げかけられる生徒を育てる。

(2) 生徒に届けたいメッセージを明確にする

- ① 授業の目的を明確に示し、授業の最後には「何ができるようになったか」を明示
- ② バックストーリー (授業の振り返りや補足) をクラウドに提示
- ③ 安心・安全が担保された教室環境づくりや、思いを込めた声掛け

遠隔授業は画面越しであること、授業者は生徒と日常の学校生活を共にしておらず、この時間でしか生徒に会えないことから、1回1回の授業を計画する際に、「何を届けたいか」がより強く意識される。このことにより必然的にワークや演習の内容も精選される。また、授業時間外に授業者と学習者がつながる手立てとして、クラウドの活用は有効であり、ポートフォリオのように学びの成果を蓄積することもできる。

遠隔授業では、授業者も学習者もお互いに積極的な反応を示すことで円滑なコミュニケーションが実現する。生徒が自ら積極的に発言をしたり、表情等で反応をしたりできるためには安心・安全が担保された教室環境づくりが欠かせない。授業者は、傾聴、承認、支援の声掛けを心掛けたい。

(3) 教師も生徒もチームで取り組む (関係性の質を高める)

- ① 授業づくりの懇談 (届けたい思いの共有)
- ② 他者参照、途中参照 (学びに向かう姿勢を含む)、お互いの顔が見える授業
- ③ 未来起点のフィードバックをする (教師、生徒、この事業に関わる全ての人)

センター配信型遠隔授業で最も意識したいことは、当たり前のことではあるが、遠隔授業だけでその生徒を育てているのではないということである。この授業以外での生徒の様子や、日常生活で発揮された学習効果の表れなど、学校と情報共有し、チームで取り組むことが大切である。今回の調査研究でも、構成校の先生方が、授業後の生徒の様子や授業の感想をフィードバックしてくれた。また、遠隔授業中も多くの方が見学に来て、支援の声掛けをしてくれた。このことが授業者のモチベーションにもつながり、より質の高い授業を届けたいという意識につながる。また、今回の企画の実施にあたり、授業担当者と事務局担当で生徒に何を届けたいか、そのためにどのような授業計画を立てるか、思いを共有し合う打ち合わせを念入りに行い、チームで授業づくりを行うことで、授業担当者が連携して生徒の学びを支援することができた。遠隔授業においては、配信側 T1 と受信側 T2 が連携して信頼関係を構築し、生徒の様子や学習の表れについて情報共有しながら授業に取り組むなど、生徒の学びを支援することを大切にしていきたい。

令和7年4月から、遠隔授業配信センターの運用が開始されるが、受信校との信頼関係を構築しながら、遠隔授業教員、受信校、管理機関がチームとして連携し、生徒に深い学びを届ける。

- (1) 学習者主体の学びを実現する(1人1人が主人公)
- (2) 生徒に届けたいメッセージを明確にする
- (3) 教師も生徒もチームで取り組む(関係性の質を高める)

チームとして取り組むために

- ・各学校のスクールポリシーを踏まえて、育てたい生徒像を意識し、他教科・科目等の学びと連携する
- ・遠隔授業担当者ミーティングの実施
(本校→分校の授業者、他県の授業者など)



3. 通信教育の実施やその運営体制に関する取組

3.1. 調査計画

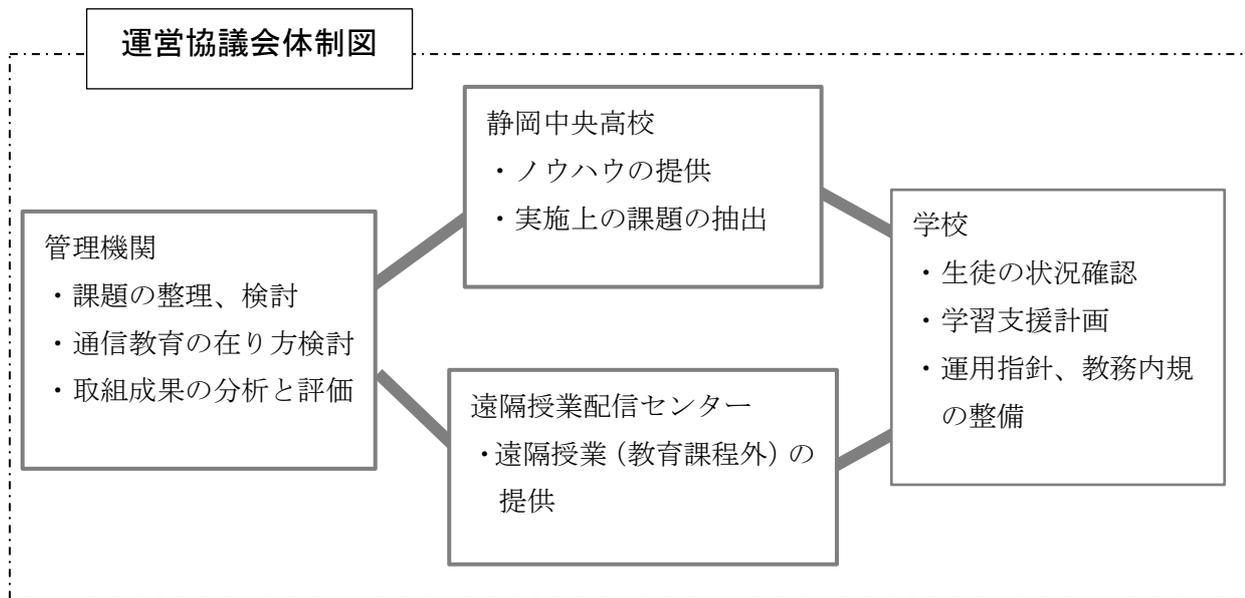
静岡県では、不登校・病気療養中の生徒に対する遠隔教育の実施は、在籍校で対応することとしている。令和6年2月の文部科学省通知を踏まえ、3月末に県としての運用指針及び留意事項を各校に発出した。その中には、遠隔授業実施にあたっては、「各校で運用指針を整備すること」、「生徒自身の心身の状態や学習意欲、保護者の協力体制などについて十分に把握すること」、「面談等で運用指針について十分に説明すること」などが示されている。学校から寄せられた相談や質問事項については、地区別教務主任研修会当で情報共有し、各校で適切な支援を行うことができるよう理解を深める。

通信教育に係る調査研究については、静岡中央高校通信制の課程を中心拠点とし、管理機関と中心拠点が連携して取り組む。令和6年度は「通信制高校の在り方検討会」を立ち上げ、通信制高校の生徒の状況や学校の課題、転編入学者増加の状況などの現状と課題について整理し、デジタルレポートの導入や、学習記録のICT化、多様なメディアを利用した学習の充実等、通信教育の在り方について検討する。

また、静岡中央高校では、教育課程内の取組として、通信制課程における教育の多様化を目指し、芸術科目「書道」において遠隔を利用した学習指導の研究を行い、通信教育における可能性を検討する。教育課程外の取組では、学校間連携による課外活動や補講等に参加し、教育効果を検証する。

3.2. 実施体制

静岡中央高校通信制課程を中心拠点とし、ICT や運営体制の整備においては静岡県教育委員会および総合教育センターが支援を行った。教員の業務負担軽減や学習支援の方法についても組織的に検討が進められた。



《令和6年度 通信制高校の在り方検討会》

教育委員会 (高校教育課)	学校づくり推進室長
	指導第2班教育主幹 (定時制・通信制担当)
	学校づくり推進班教育主幹 (定時制・通信制担当)
	学校づくり推進班教育主幹 (遠隔授業配信センター担当)
静岡中央高校 通信制課程	(定時制・通信制) 校長
	中央キャンパス副校長
	東部キャンパス副校長
	西部キャンパス副校長

3.3. 取組概要

月	通信教育に係る調査研究
4月	・通信制高校の現状と課題の整理 (生徒の実態、教員の業務負担、学びの提供体制等)
5月	・通信教育のICT導入に向けた課題の検討 (オンラインスクーリング導入に向けた課題の検討/学習支援の在り方の検討/レポート提出や学習状況管理等のICT化の検討/全日制高校の不登校、病気療養生徒に対する通信教育と通信制高校の関わり方)
6月	・第1回通信制高校の在り方検討会の実施 (オンラインスクーリング導入に向けた課題の検討/学習支援の在り方の検討/ICT化の検討/全日制高校の不登校、病気療養生徒に対する通信教育と通信制高校の関わり方)
7月	・「書道」における遠隔授業の調査・研究の検討

8月	・オンラインスクーリングの実施に向けた機器の検討
9月	・不登校、病気療養中の生徒に対する遠隔教育及び通信教育の現状と課題の整理 ・「高等学校等における多様な学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学びの実現について」の補足資料作成
10月	・オンラインスクーリングの試行に向けた機器の準備
11月	・第2回通信制高校の在り方検討会の実施 (通信制高校の現状と課題/ICT化に向けた課題の整理/全日制と通信制の併修に向けた課題の整理/不登校、病気療養中の生徒に対する通信教育と通信制の課程の関わり方)
12月	・学校間連携(遠隔による課外活動)に希望者が自宅等から参加(学習効果の調査・研究) ・「書道」の講座で、オンデマンド教材の代替として遠隔スクーリング試行(1回目) ・静岡中央高校通信制課程、文科事業伴走支援団体、県教委の3者打合せ(通信制高校の現状と課題/学校横断探究プロジェクトなど)
1月	・学校間連携(遠隔による課外活動)に希望者が自宅等から参加(学習効果の調査・研究) ・遠隔スクーリング試行(2回目) ・垣根事業合同ミーティングへの参加(島根県の取組や実施状況等の情報収集)
2月	・通信制高校の在り方に係る現状と課題の整理
3月	・不登校、病気療養中の児童生徒への学習支援のワーキンググループ

3.3.1. 通信教育実施表

中心拠点(※1)	受信校	教科名	科目	教育課程(※2)	開設学年	通信教育実施理由
静岡中央高校	静岡中央高校(自校)	芸術	書道	課程内	選択者	メディアを利用した学習機会の保障
県総合教育センター	静岡中央高校含む構成校	総合的な学習の時間	探究活動	課外活動	希望者	メディアを利用した学習機会の保障

※1 自校で通信教育を実施した場合、中心拠点欄を空欄とし、受信校欄に実施校を記載すること。
その際、括弧で(自校)と付記すること。

※2 教育課程外で通信教育を行った場合、実施状況(夏期講座・補習等)を記入すること。

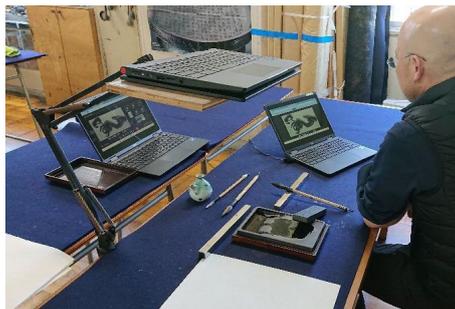
3.4. 取組内容

本年度は、個別最適な学びの実現に向け、不登校生徒や遠隔地在住の生徒への学習支援の充実を図るため、芸術科目「書道Ⅱ」においてメディアを利用した学習指導について研究を行った。Chromebookと書画カメラ、会議用カメラなどを用いた配信環境を整備し、教員の実演や板書をリアルタイムで共有する体制を構築した。

《実施体制》

配信側使用機器	パソコン（教師操作用、書画カメラ用、板書投影用の3台）、書画カメラ、カメラ
配信使用ツール	Google Classroom（課題レポート提出）、Google meet
受信側環境	自宅（書道ができる環境）等でパソコンやタブレットを使用して参加
実施者	静岡中央高校 外山好司教諭（サポート 磯部拡美教諭）
実施内容	遠隔による学習支援を実施。生徒は実施後に、練習物を写真に撮って Google Classroom に提出し、アンケートフォームに学習の振り返りを入力する

《配信側の様子》



特に、手元の筆運びや構成の工夫などを高画質カメラで共有することで、視覚的理解を促進することができた。「漢字仮名交じりの書」や「仮名臨書」を題材に、授業者はスライド資料や実演により、書道の構成や筆の運び、リズムなどを丁寧に解説し、実際に手本を提示しながら生徒がそれぞれの場で作品に取り組めるよう配慮した。

《参加生徒の感想》

- ・（学校で対面による実施に参加した場合と比較して）遜色ないと感じた。普段の授業と空気感が変わらずに参加することができた。
- ・他の先生や別の生徒の作品を見ることができるのが面白く、他者の工夫や違いを知ることができ、自分の作品に取り入れやすかったと感じた。
- ・先生のお手本を画面上で見ることができたので、筆の使い方やリズム感も感じ取りやすかった。
- ・他の先生方も参加していて、わいわいした雰囲気がとても楽しかった。

3.5. 考察

本取組は、不登校や遠隔地在住の生徒を含めた多様な学習ニーズに応える新しい学びを創出した。生徒の感想からは、「他の生徒の作品を見るのが楽しかった」「普段の授業と同じ空気感で参加できた」「学ぶことが楽しいと感じられた」といった声があり、個別最適な学びと協働的な学びを両立する可能性が示された。一方で、接続や画角調整、生徒の反応の把握など運営上の課題も明らかとなり、今後はこれらの改善を進めることで、より効果的な学習支援の実現が期待される。

また今年度、遠隔授業に係る調査研究で実施した学校間連携活動に、静岡中央高校通信制の課程の参加希望生徒も参加し、他校の生徒と学び合うことの楽しさを体験することができた。実施後、通信制課程の先生からは、参加生徒の表れとして教室内でも生徒同士の対話が増えたこと、活動後に生き生きとした表情で下校していく様子が見られたこと、他校の生徒との交流を楽しみにしている様子などのフィードバックを頂き、生徒が「学ぶことの楽しさ」を感じながら学びに向かうことができたことを実感した。ここでの「学ぶことの楽しさ」

とは、協働的な学びの中で多様な見方・考え方に触れながら、自己調整して学びに向かうことである。

不登校・病気療養中の生徒の、通信制課程の併修による単位認定の実現については、まだ整理すべき課題が多くある。「学年制」と「単位制」の違いや、通信制高校への年度途中の転編入学者が増加している状況、通信制課程の教員の業務負担などが課題の例であるが、目指したいのは、どの生徒も「学ぶことの楽しさ」を実感しながら学びに向かうことができる、そのための支援を届けることだと考える。次年度以降、静岡中央高校通信制課程での取り組みや、遠隔授業配信センターでの遠隔授業に係る調査研究の成果の活用など、学校と管理機関が連携しながら、個別最適な学びの実現学習支援体制の在り方を検討していく。

4. まとめ

静岡県における「センター配信型遠隔教育ネットワーク」は、小規模校における教育機会格差を埋め、地域や校種の垣根を越えて生徒の学びを飛躍的に拡充する有効なモデルとなり得ることが確認された。今後は、通信環境の整備、運営体制の持続可能性強化、通信教育の在り方の検討を通して、静岡県モデルの確立を目指す。

(1) 高校生の学びにおける変容

遠隔授業や通信教育の導入により、生徒は地理的制約や開講科目の制限を越えて、自らの関心や進路に応じた学びを選択できるようになった。特に、書道Ⅱのオンライン授業では、他校の生徒と作品を見せ合い、互いの表現を参考にする姿が見られ、学びが「評価されるもの」から「共有し合い、刺激を受けるもの」へと変容した。「学ぶことは楽しい」という実感が、遠隔でも確かに得られることは大きな意義であり、生徒の主体性・協働性・創造性の育成に直結するものである。

(2) 教員の授業づくりと配信センターの組織づくり

遠隔授業の設計には、教材や進行の工夫だけでなく、接続・配信環境の整備、複数校との連携調整など、高度な授業運営力と協働的な組織運営が求められる。本年度の取組では、機器整備や Google Classroom の活用、学習進捗の可視化などが進められ、教員間の情報共有や役割分担の仕組みも生まれた。遠隔授業を通して、授業づくりの標準化・共有化が進み、学校間・教員間の連携がこれまで以上に活性化されたことも、持続可能な教育モデル構築に向けた大きな成果である。

(3) 静岡県のモデルを全国に展開するために必要な視点

本事業の成果を全国に波及させるためには、地域の文脈に応じた柔軟な運用モデルの提示と、国・自治体による制度的・財政的な支援が不可欠である。特に、通信教育や遠隔授業の単位認定の制度整備、教員の人事・勤務制度に配慮した柔軟な運営支援、多様な学習スタイルに対応した ICT インフラの地域間格差是正が重要である。また、取組の成果が見える化し、学習ログや生徒の声をエビデンスとして積み重ねることで、遠隔教育の信頼性を高めるとともに、他地域への展開を後押しすることが求められる。

今後は、本年度の成果と課題を踏まえ、さらに受信校の ICT 環境や教員支援体制の強化、科目拡充と探究学習との融合、持続可能なネットワーク運営に取り組む必要がある。静岡県発のこの挑戦が、全国の小規模校における新たな学びの可能性を拓くモデルとして定着し、生徒一人ひとりにとって豊かな学びの機会が保障される社会の実現に寄与することが期待される。